



「時間差テスト」の勧め

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 「定期試験」の常識と問題点

生徒の評価にあたり、その中心となるのが「テスト」による評価であろう。そして、その「テスト」の中心となるのが「定期試験」である。

「定期試験」は、改めて言うまでもないが、一定の学習を終えたあとに、定期的実施される到達度テストである。1学期に2度、「中間試験」「期末試験」として行われることが多いが、「期末試験」のみというところもある。試験の対象となるのは、通常その前の定期試験の試験範囲の後から、当該の試験が実施される前までの学習範囲となる。そして、この定期試験は、生徒が入学してから卒業するまで、定期的実施される。

しかしながら、毎回の定期試験の内容同士が密接に関連づけられているわけではない。それは、定期試験は、それぞれの期間の学習範囲だけを試験対象としているからである。定期試験という枠は同じであっても、中身は毎回異なっている。

ところが、このような定期試験のあり方には、言語学習の特性を考えると、問題点が見えてくる。言語は、それが母語であれ外国語であれ、実はとても長い時間をかけてゆっくりと獲得されるものである。したがって、そのプロセスも、時間的に長いパースペクティブの中で見ていく必要がある。にもかかわらず、「定期試験」というシステムでは、学習直後(1, 2ヶ月の時間は言語習得の時間的なパースペクティブから言うとかかなり短い期間と言える)の理解の具合だけを見ていることになる。

2. 「時間差テスト」の勧め

みなさんは「時間差攻撃」という言葉を知ってい

るだろうか。「時間差攻撃」とは、ミュンヘン・オリンピック優勝の日本男子バレーボール・チームが考案したバレーボールの戦術の1つである。ここでは、これをもじって「時間差テスト」というテストを提案する。この「時間差テスト」とは、教えたときから時間をずらして行うテストのことを言う。たとえば、ある文法項目を教えた直後は、生徒の側もその文法項目がテストされると思って準備しているが、少し時間がたつと、このような意識は薄れてくる。意識が薄れたところで、テストをするのである。このことで、本当の意味で、その文法項目が身につけているのかどうかを見ることができる。

同じ問題でも単に時間をおいてやってみるだけで、出来具合は違ってくるだろう。これによって、定着の度合いを見るのだ。当たり前のことかもしれないが、こうした定着度合いなどは、これまでほとんど注目されてこなかった。もしこのようなテストを実際にやってみれば、いかに「基礎的な(と教師が思っている)事項」であっても、思いのほか身につけていないことがわかるだろう。

また、同じ言語項目であっても、それが現れる文脈であったり、その言語項目が含まれる文の負荷が高かったりすると出来が異なってくるだろう。たとえば、ある学習者が He lives in Tokyo. という文を言えたとしても、それだけで三単現の s が習得されたとは言い切れない。文が長くなったり、使い慣れない単語を使って文を作ろうとしたりすれば、あるところでは「できた」言語項目の使用が「できなくなる」ことはあるはずだ。この意味では、言語項目の習得というのは、白か黒かというほど単純なものではないのだろう。

3. 「時間差テスト」のもう1つのメリット

時間をおくことで、さらなるメリットもある。「英語」は積み上げ教科であるから、通常学習が進むと、関連する学習項目が出てくることになる。そこで、その新しい学習項目との使い分けができるのかどうかということも、この「時間差テスト」では判断できるようになる。

まず、文法の習得について考えてみよう。文法の習得では、文法形式の処理を身につけなければならない。たとえば、現在進行形では、人称や時制によってbe動詞の適切な形を選択し、その後動詞の原形にingをつけることになる。定期試験では、こうした処理について主に見ていると言えるだろう。しかし、現在進行形を習得したと言うには、これだけでは不十分である。文脈の中で、時制に関わる様々な言語形式のうち、現在進行形がふさわしい場面、その形式を選択できなければならないのだ。

しかしながら、定期試験では、学習した言語材料だけが試験対象となるために、動詞の時制がらみのテストとしては、現在進行形の「決め打ち」のような形となる。これは、テニスにたとえるなら、バックハンドの練習として、バックを打つための球だけを出して、バックが打てるかを見るようなものである。しかし、これができたからといって、実際の試合ではバックが打てるとは限らない。来たボールに対して、バックで打つか、フォアで打つかの判断を瞬時に行って体勢を整えなければならないからだ。

では、このような力を見る「時間差テスト」とはどのようなものか、事例を見てみよう。

()内の語に必要な語を補って下線部に入れ、会話が成り立つようにしなさい。ただし()内の語は必要に応じて形を変えること。

Paul : Where is Mother?

Mr Green : _____ in the kitchen. (cook)

Paul: Oh, I see.

解答 : She is cooking

この問題では、文脈から現在進行形の使用を判断した上で、その形を作らなければならない。

こうして考えてみると、中学で学習する動詞がらみの文法項目だけでも、このような「時間差テスト」の候補はかなりのことがわかる。

- ・be動詞と一般動詞の文の疑問文・否定文の作り方の区別
- ・単純現在と現在進行形の区別
- ・現在進行形と過去進行形の区別
- ・過去形と現在完了形の区別

また、これらの項目同士の組み合わせもあるだろう。たとえば、現在形、過去形、現在完了形の3つの区別となれば、かなりやっかいである。こうして見てくると、多くの定期試験では、これらの対比的な視点が随分と欠落してしまっているのではないかと。

4. 「時間差テスト」応用編

もちろん、「時間差テスト」の対象となるのは、動詞がらみの文法項目とは限らない。前置詞などもいくつかまとまったところで、その使い分けを問うことが必要だろうし、「定冠詞と不定冠詞」も使い分けができるかどうか重要である。

また、意味や言語機能でも同じことは言える。たとえば、canやmayやmustという助動詞には、「…できる」「…してもよい」「…しなければならない」という意味のほかに、可能性に関わる意味もある。これらの意味が出揃ったところで、その使い分けに関する問いかけをしてもいいだろう。

5. 3年間を見通して

受験勉強に向き合って初めて、3年間の学習項目の定着の度合いを知るというのでは、本当は遅すぎるし、学習としても効率的ではないだろう。このようなテストを「定期試験」の中で採用するかどうかは、議論の余地があるかもしれない。しかし、広い意味の「評価活動」においては、「時間差テスト」で見えてくるような定着が図られているかを知ることが非常に重要である。そして、こうした「時間差テスト」を行うためには、3年間を見通した指導と評価の計画を立てることが重要であるのは、言うまでもない。